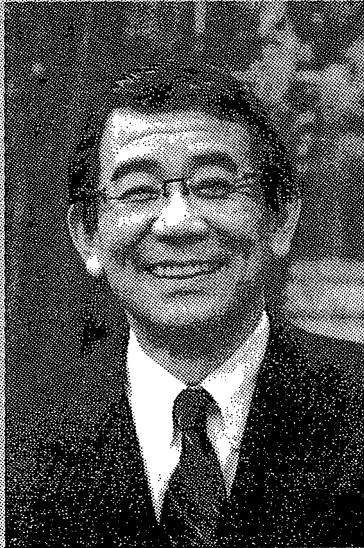


視
点
8

思考・行動

Thinking and Behavior

偉大なる日和見主義



渡辺利夫 (わたなべ としお)

拓殖大学学長

昭和14（1939）年山梨県甲府市生まれ。慶應義塾大学経済学部卒。同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授を歴任。

著書に『成長のアジア・停滞のアジア』（講談社学術文庫、吉野作造賞）、『神経症の時代』（TBSブリタニカ、開高健賞正賞）、『開発経済学』（日本評論社、大平正芳記念賞）、『私のなかのアジア』（中央公論新社）、『西太平洋の時代』（文藝春秋、アジア太平洋賞大賞）、『新脱亜論』（文春新書）、『中国は歴史に復讐される（岡崎久彦氏との共著）』（育鵬社）など。

● 「ハイ、私が○○博士です」と切り出す韓国の知識人

韓国の知識人との付き合いはもう四十年ほどになる。四十年前といえば、私がまだ三十代の頃である。十年、二十年と付き合っていくうちに、彼らの多くは政府の大物となつて、大臣や外交大使や国際機関のトップクラスへと昇進していった。

日本人のこちらの方はと、そういう要職とはまるで縁がない。韓国のアカデミズムと政治との距離は、日本人にはちょっと信じられないくらい近い。それに、当時は経済学のような実践的な学問分野を修めた人はまだ少なかつたからでもあろうが、会う度ごとに友人の政治におけるポジションが上がつていった。

韓国では、閣僚の全員がアメリカの博士号（Ph. D）の取得者であつたりすることがままある。日本の閣僚で博士号をもつてている人など滅多にお目にかかるない。日本人の学者で、政治の世界に入つていこうという意欲のある人は稀だし、政治の方でもそんなことは学者に期待していない。審議会などに呼ばれて政策的な意見を開陳することははあるが、これはあくまで裏方でしかない。

李朝時代の政治支配層は「両班」^{ヤンバン}と呼ばれ、文班と武班の二つが同格であるかのような響きがある。しかし、これはあくまで建前であつて、李朝五百年余の歴史の中で武人が政治の実権を握つたことはなかつた。あくまで「崇文」^{すうぶん}と「重文輕武」が原則であつた。

「文禄・慶長の役」で朝鮮に出兵した豊臣秀吉の水軍を撃退し、救国の英雄として今日の韓国でも畏敬されているのが李舜臣将軍であるが、このような人でも政治的中枢をきわめることはできなかつた。中枢はつねに文治官僚であつた。戦国時代から徳川時代にいたるまで、武人による政治支配の体制を確立してきた日本とは、まことに対照的である。文治官僚の関心は、原典である「四書五経」の修得にあつた。

政治支配の中核を占めた者が、きわめつきの難関である「科挙」に合格した知識人である。知識人がすなわち政治家であり、政治家とはその頭脳において第一級の知識人でなければならない。長らくつづいたこの伝統は、そう簡単に変わるものではない。

韓国の知識人の社会的地位は、私の目からすれば、いまなお大変に高い。私の親友の一人に、ソウル大学で経済学を講じている研究者がいる。国際的にも名の通つた経済学者である。彼はイギリスとアメリカと日本の三つの国のも權威ある大学の博士号をもつてゐる。博士号を三つももつてゐる日本人に、私はまだ会つたことがない。

日本ではつい先だつてまで、博士号など「足の裏にくつついたご飯粒のようなものだ」といわれていた。「取らなければ気持ちが悪いが、取つたからといつて別段どうということもない」といつた意味である。博士号を取れなかつた人の負け惜しみのようにも聞こえるが、半分以上は眞実である。

日本では博士号などもつことなく、学会や政府の審議会の座長や議長といったポジションを

得ている人が多い。博士号をもつている人が、自分の名刺に「○○学博士」などと印刷している研究者はまずいない。しかし、その名刺をひっくり返してみると、自分のローマ字名の後にちゃんと「Ph. D」と刷り込んである。

日本の国内では自分が博士であること人前でいうことには憚りがあるが、外国人には Ph. D であることをアピールしなければ尊敬されにくいことは知っているのである。

件のソウル大学の友人のことである。仮に金○○先生としておこう。私が彼の大学の研究室を訪れて雑談をしているところに、外部から電話がかかってきた。先生の第一声は、「ハイ、私が金○○博士です」

というものであった。自分のことを自分の方から博士だと切り出すのである。日本では考えられない。

●韓国併合は「観念的に」無効——観念主義の韓国人

韓国の政治支配層が「四書五経」を徹底的に修得して科挙の試験に合格した文治官僚であることは今述べたが、そんな伝統を引き継ぐ韓国の知識人の思考様式は、日本の知識人に比べると相当に観念的である。じゅきょう儒教的倫理において「徳」は、最も重要な文字通りの「徳目」であつて、韓国は「徳治主義」の国だという人がいる。私もそう思う。この「徳」に合うか合わないかという判断が、韓国の知識人の胸の底につねに潜んでいる。

平成二十二年は韓国併合百年目に当たる。韓国のジャーナリズムではこのテーマについて多くの知識人に発言させてている。その発言は私の目には「千篇一律」に映る。強圧によつて結ばれた韓国併合条約は無効だという主張において、韓国の知識人の見解は一致している。百年も前の、もう「歴史」そのものとなつてゐる事実を無効だの有効だのという感覚は實に不思議である。

要するに、儒教的な「徳」において高いはずの自國が、かつては「夷」であった「徳」の低い日本によつて併合を強要されたという事実自体がどうにも許し難い、というのが彼らの発言に秘められた感覚なのであろう。

別にピストルを頭に突き付けて、時の総理大臣李完用^{イワンヨン}に条約調印書への書名を強要したわけではない。弱者に「安住の地」のなかつた帝国主義の時代にあつては、そして政治的凝集力を欠いていた李朝末期の韓国にとつても、併合は他に選択肢のない方途^{ほうと}であつたと私は考えるのだが、そんなこと韓国で発言しようものなら、友情は一挙に敵意に変わつてしまいそうである。

日本による韓国併合は、ポーツマス条約を通じてロシアにより、また日英同盟下のイギリスにより認められ、さらにはアメリカとの間でも、日本がアメリカのフィリピン領有を承認し、アメリカが日本の韓国統治を承認するという桂・タフト協定を結んでいた。日本の韓国統治は、幾重にも国際的に承認され、併合への道を阻止するものはなかつた。各国との合法的な条

約や協定に則つて日本の韓国統治が展開されたのである。

一つの思考実験として、日本の首相が韓国の主張に同意して、併合は無効であつたと発言したとしてみよう。そうすれば、韓国はその後に生じた百年の歴史の再解釈を余儀なくされる。現実にあつたことがなかつたというふうに、現実にはなかつたことがあつたというふうに、歴史をヴァーチャルなものとして再構築しなければならない。おそらく韓国はパニックに陥るにちがいない。

要するに、韓国の知識人は、併合条約は「無効だ」という観念の中にどっぷりつかっていたのであろう。日本に「無効だ」などといつてもらつては困るのである。観念主義の「罷わな」である。この観念主義に押されて日本は、戦後五十年には村山談話という、併合百年の平成二十二年には菅談話という謝罪文書を書かされたのだが、韓国のことまるで知らない愚かな振る舞いである。

●事実は事実として認めて、なすべきはなす——日和見主義な日本人

日本とて、その近現代史を少し振り返るだけで、関税自主権やら領事裁判権の不平等条約、三国干渉という屈辱、何より東京裁判という前代未聞の国際的非合法を押しつけられたりしてきた。しかし、日本人の考え方は、「あまりにひどい仕打ちだが、結局は自分の国力と軍事力が屈辱を呑まざるを得ないほどに弱いのだから致し方なし」とする、自省の気分の方が強

い。自省が昂じて自虐にさえなつてゐるほどである。村山談話も菅談話もそうである。

このへんが日本人の狡いところなのだが、どうも事を荒立たせるのが面倒だから、謝つてすむことならそうしておいた方がいいといった程度に考えがちである。謝罪文書など、つまりはそんな気分の投影である。韓国併合条約が本当に悪いことだったと考える政治家も多少はいようが、平均的な日本人は歴史に無関心なのである。功利的といえば功利的、合理主義的といえば合理主義的な民族である。事を倫理や「徳」によつて解釈するのではなく、事実は事実として認めて、なすべきはなす。実は、このようなところが日本の強さの秘密なのである。

日韓の近現代史を顧みれば、このことがわかる。列強が極東に勢力を伸長させた「西力東漸」の時代のことである。列強に抗するに、日本が「尊王攘夷」を、朝鮮が「衛正斥邪」と称する排外主義をもつて応えたという意味では、両者は共通している。衛正斥邪とは、「正」を儒学とし「邪」を夷狄として、「正を衛り邪を斥ける」の意である。「尊王攘夷」は、王政復古により「夷」を「攘＝はらいのける」の意であり、両者に差はない。

しかし、日本の尊王攘夷は、韓国のそれと比べてそれほど強固なものではなかつた。柔軟といえども柔軟なものであつた。「日和見主義」だといつてもいい。アヘン戦争における清國敗北の報に接するや、幕府は「異国船打払令」をただちに撤回したほどであつた。

そして嘉永六（一八五三）年六月、アメリカ東インド艦隊司令官ペリーが遣日国使として軍艦四隻を率いて浦賀に来航、大統領フィルモアの国書を幕府に手交。ペリーは翌年の安政元年

一月にも軍艦七隻を引き連れて神奈川沖に来泊。この二度にわたるペリー来航を経て、日本は日米和親条約を結んで開国した。安政五年六月には、アメリカ駐日大使ハリスとの間で日米修好通商条約を締結、日本は五港を開港するという変わり身の早さであった。

長州藩が英米仏蘭四か国連合軍の火力に圧倒され、薩摩藩が薩英戦争で脆くも敗北して以来、尊王攘夷は消え失せてしまった。転じて瞬く間に攘夷論は開國論へと傾き、同時に富国強兵の緊急性を薩長に悟らせ、これが明治維新へとつながつていったのである。

日本の王政復古は、朝鮮のそのように固陋なアンシャンレジーム（旧体制）への復帰ではなく、逆に開かれた体系をもつてその特徴としていた。明治元年三月、西郷隆盛さいこうとうぜいと勝海舟かつかいしゅうの合議によつて江戸開城、それとほとんど同時に新国家建設の大方針が五箇条の御誓文として發布され、これが後の近代的立憲國家創造の礎いしづえとなつた。

対照的に、「西力東漸」に対して朝鮮の大院君テウオシングンの採用した政策は、鎖国政策と專制君主制の徹底であつた。支配層両班の派閥割拠の拠点であつた書院を廃止し、これを中央政府の管理下におき中央集権の強化を図つた。また、安東金アンドンキンなどの特權的門閥を追放し、大院君に忠誠を誓う官僚のみを周辺に配して、專制主義的官僚政治を極度に進めた。

大院君は対外的には帝国主義列強の開国要求をことごとく退け、内政においては專制主義の強化に成功した。これをもつて「衛正斥邪」の旧思想が朝鮮の追求すべき道だとの思いを深め、中華帝国の属邦ぞくほうたるの誤りなきを確信し、政治と軍事における近代化への道をみずから閉

ざしてしまった。

王政復古が、片や日本においては富国強兵を促し、片や朝鮮においてはアンシャンレジームの強化を促すという対照性を生み出したのである。ここに日韓の近代化の分岐点があり、最終的には後者が前者に併合されるという事態で帰結したのである。

●人生は「お勤め」、死は「お迎え」

韓国の知識人の思考と行動様式について見てきたが、そういうえば私が辟易させられた彼らのある振る舞いを思い起こしている。私は少々の酒飲みでヘビースモーカーである。酒飲みであるがゆえに韓国、中国、台湾の学者との付き合いも深いものとなつたと自負している。

辟易させられたというのは、料理屋などで彼らと一杯やつていると、必ずといつていいほど、これは肝臓にいいからもっと食えとか、こいつを食うと目がよくなる、これほど精力のつくものはないとか、あげくはこれを食つておけば二日酔いにはならないから今夜は夜通し飲もうじやないかとか、要するに食事を健康に結び付ける話題がやけに多いのである。

「医食同源」の思想だというらしいのだが、食事ぐらいはこちらの好きにさせてくれといい返してやりたいほどである。儒教倫理的な「徳」の世界にいながら、「不老長生」の追求というのも何やら矛盾のような気もするが、そのへんは私にはよくわからない。

私のゼミの韓国学生なども、朝鮮人参だの松の実だと、帰国しておみやげに買ってきて

くれるのは決まって「健康食品」である。学生との飲み会などでも、先生にはあれを食つてますます元気になつてもらおう、これを食つてもつと長生きしてもらおうと、彼らは彼らなりのやり方で師への思いをそういう形で表そうとする。

「不老長生」は彼らにとつて大変な慶事であるらしい。私も平成二十一年に古稀を迎えたのだが、日本人の教え子でそんなことを気づく者はほとんどいない。古稀の祝宴の発案者は案に相違せず、二、三人の韓国大学生で、彼らの提案によつて宴を張つてもらつた。学生の招きにしては少々贅沢であり、彼らの懐のことを考えると、気になつて仕方がなかつた。

私の父母がなくなつた、私が三十代の頃までの日本では、人生は「お勤め」であり、死は「お迎え」だという表現で、老いて病み、死んでいくことは運命だと受容されていた。倫理や宗教にすがつて少しでも長生きしたいといった観念は、現在より随分薄かつたようだ。

しかし、何時の間にやら日本人も「早期発見・早期治療」などという、医師会やら薬品業界やら厚労省やらの「利益共同体」の詐欺まがいのプロモーションに引っかかってしまったようである。末期ともなれば、中心静脈栄養やら人工呼吸器やらを装填そうてんされて、実に無惨な最期を迎える人が増えてしまつた。日本人の死生観の墮落としかいいようがない。

それでも、厚労省の「終末期治療に関する調査報告等委員会報告」（平成十二年）をみても、「延命治療はやめてほしい」と答えた人が調査対象者の七四パーセントを占めているという。このへんに日本人の死生観の在り処あつかが示されているような気がする。

「不老長生」の観念が骨の髓まで染みこんでいる韓国人や中国人や台湾人が、日本人なみの医療施設や医療制度に囲まれれば、その不幸は現在の日本人以上のものとなろう。しかし、何より日本人自身が、人生は「お勤め」、死は「お迎え」という伝統的価値に回帰しなければ、どうにもしようがないと思うのである。

● おのずと秩序がつくられる社会

バスや電車や地下鉄で、誰に命令されたわけでもないのに、人々は自然と列を整えて到着を待っている。先だつて我が家の近くのバス停で七、八人が並んでいるところに、若い女性が列の二、三番目辺りに、携帯電話で話をしながら割り込んできたようにみえた。誰もそんなことに注意はしないし、怪訝けげんな顔をする人もいない。割り込んできたはずの女性は全員がバスに乗り終えたのを見届けた後、最後に静かに乗ってきて、その場はいつもの通りの穏やかさであった。最後にきた者は最後に乗るはずだという、意識せざる意識が全員に共有されているのである。

日本でも東京と大阪では随分とちがつていて、大阪では整列などほとんどしないよ、という当地出身の同僚がいつていたので、大阪にいった時に観察してみたのだが、なるほど人々は東京ほどきれいには並んではない。それでも、後にきた人が先にきた人をかき分けて早く乗り込もうという様子はなく、列は乱れていても先と後の関係はよくできていたように私には見え

た。

中国では、列の中に後れてきた者が入り込んで、それも一人ではなく子供や親などを連れて四、五人で割り込んでくるといった光景を見ることがよくある。数年前、日本人、中国人、韓国人から成る十数名のゼミ生と旅行の途次、上海浦東とじょうにある展望台に上ろうと列の最後尾に並んだことがある。早速、中国大学生の二人が列の先頭にまで走つていって、二百人ほどの列のトップに私どもを連れていつて展望台にすぐに上ることができた。

どうしてそんなことができたのかと中国人学生に聞くと、「日本から偉い先生が来ているから、場所を空けてやってくれ」と説いたところ、列を譲つてくれたというのである。私はどうにも居心地が悪かったが、彼らは彼らなりの親切でやってくれたことだからと、別に注意もせずにすませた。

そういえば、先だっての上海万博で、確か韓国で人気の若者歌手グループのコンサートが無料で公演されることになつて、無料チケットを求めて群衆が音を立てて入り口に押し寄せる姿をテレビ画面で見た。押しつ押されつの「阿鼻叫喚あびきょうかん」であつた。こんなこと日本ではまず考えられない。戦後の闇市だつて人々は整列していたのを写真で見たことがある。おのずと秩序がつくられる、そういう社会が日本なのではないかと思う。

● 「昨日の敵は、今日の友」という社会システム

一つの社会システムが別の社会システムに変わる時には、多かれ少なかれ暴力は付きものである。日本の場合でも、開国維新期においては戊辰戦争^{ほしんせんじゆ}、西南戦争などで血が流れたことは疑いのない事実だが、フランス革命、ロシア革命、中国共産革命でどれくらいの殺戮^{さつりく}があつたかを思えば、日本のそれはやはりほんのわずかであつたといつていい。一つの社会システムはそれに見合う秩序をつくりだすが、この秩序は次の社会システムがつくる別の秩序に柔軟に適応して、軋轢^{あつれき}や摩擦による社会的資源の浪費を避けることができているようと思う。

一つのシステムと次のシステムとの間に矛盾と相克^{そうこく}が生まれても、これを決定的な対立とはせず、次の時代に「報復」せねばならないような「怨恨」^{えんこん}を最小値のものとするような知恵が、日本人のDNAの中には潜んでいるようにも思われる。実際、戊辰戦争などで敗れた佐幕藩の人々の中から、明治政府の要人に登用された人の数は相当のものだつた。これは古い時代から現在にいたるまで、ほとんど同一の人種が同一の言語圏の中に住まい、宗教的な対立のほとんどなかつた「同質的」な日本人の社会的特徴なのかもしれない。

日本にも血縁的な共同体はもちろん存在する。しかし、韓国や中国のそれに比べれば、日本の血縁はそれほど濃くはない。男子单系制を通じて血族を縦に継承していくという相続原理は、日本においては韓国や中国よりはるかに薄い。

それゆえ、韓国や中国においては血族の凝集力は著しく強い一方、その分だけ血族を横につないで社会全体を有機的に結合させるダイナミズムは作用しにくい。日本においては血族的結

合が弱い分だけ、社会の統合はより容易であつたかにみえる。社会的変革も血族間の抗争といった形を回避して、有志連合のような理性にもとづく集団によつて維新が図られたのもそのためであろう。

勤皇(きんのう)も佐幕もある一定の抗争の時間を経れば、「昨日の敵は、今日の友」なのである。「昨日勤皇、今日佐幕」には、変わり身の早いという意味もあるが、日本人の柔軟性をうまく表した表現なのであろう。このへんの融通無碍(ゆうづうむげ)などころを見ないと、日本のことわからぬ気をする。

◎歴史の連續性を実感できる国家

中国においては新しい王朝が成立すれば、倒された前の王朝の歴史は悪そのものとして徹底的に抹殺され、新しく書き下ろされた歴史が「正史」となる。一つの王朝と次の王朝との間に妥協はない。

対照的に、日本の歴史はその連續性をもつて特徴とする。皇統(こうとう)とはまさに、日本民族の「連續性の象徴」(平川祐弘氏)といるべきであろう。日本人ほど、美しい国土とこの国土を統べる天皇と皇室の中に、みずから生きて在ることの実感をもつて生活できる民族は、他にそれほど存在しているとは思われない。私が多少なりとも知っているアジアの中で、こういう連續観をもつているのは日本人だけだと思う。

日本人は自国の歴史にあまり深い関心を寄せない民族だといわれる。そうかもしれない。国旗や国歌にさえそれほどのこだわりがないという嘆き節も聞こえる。歴史や国旗や国歌に関心を向けないというのは、私も嘆かわしいことだとは思う。しかし、よく考えてみれば、日本人は自国の歴史、国旗、国歌を敢えて意図しなくとも、日本という一つの国家共同体の中に安んじて住まつているという感覚があつて、特段、それに拘泥せずに生きていけるのである。これはこれで大変幸せなことだと考えることもできよう。

日本という国家と民族が他国から攻撃を受けるような緊迫の事態になれば、日本人の国家共同体意識は一挙に燃え盛るのではないか。現代の日本人の希薄になりつつある国家観念については、私はこれを批判してやまない者の一人だが、同時に、私の胸中には日本人の国家観念は日本人のDNAなのだから、それほど深刻な危機意識を持たなくともいいのではないかといふ、どこか楽観的な気分が潜んでいる。

●「自分達のことは自分達で処理しよう」精神

私は現在奉職^{ほうしょく}している大学のある学部で、一つの教育実験を始めてもう十年がたつ。新入生のうち約三十パーセントほどの希望者を募つて、アジアのいくつかの貧困国に送り、各国の信頼できる現地NGO（非政府組織）にお願いして、彼らの薦める家庭にホームステイさせ、そこをベースに社会奉仕活動に参加させ、その活動の成果を「単位」として認定するという試み

である。

たとえば、フィリピンのストリートチルドレンや、スマーリーマウンテンと呼ばれるゴミの山で空き缶やビニール袋を漁つて生計の糧にしている子供達が、麻薬などの悪の道に踏み込まないよう子供会の組織化に熱心に取り組んでいるフィリピンのNGOがあつて、学生にこの子供会組織づくりの手伝いをさせたことがある。「暖衣飽食」の日本の中にいて、自分を超える第三者のために積極的に奉仕などしたことのある学生にとって、生まれて初めて弱者のために何がしかの善いことをなしたという感覚は、彼らを誇らしい気分にさせるようである。

百人を送ればそのうちの二十九三十人の学生は、一、二ヶ月のうちに顔つきまで変わつて帰つてくる。その晴れがましさが忘れられず、翌年もまた、今度は自費で出掛けしていく学生もいる。教育とは現場だけのものではなく、そのためのフィールドが必要だとつくづく思わされる。

しかし、ここで言いたいのはそのこと自体ではない。日本のごく平均的な若者である私のゼミ生で、特段の取り柄のないような学生でも、自治組織をつくりあげることは実にうまいのである。

十人ほどのチームを組み、スマーリーマウンテンで子供会づくりの仕事をさせたことがある。付き添いの教員はできるだけ指示を出さないで、彼らが自分達の方針を立てるまで黙つて待つ。二、三日もしないうちにリーダー、担当する地区ごとの責任者が決まり、それぞれの地区の子供をみごとに一つの組織にまとめあげていくのである。

もちろん、子供会づくりのマニュアルは出発前につくつてある。しかし、現地でこのマニュアルに沿つてやってみても、実際には、なかなか機能しないことがいっぱいある。そういうた
厄介な問題でも静かに見守つてやつてているうちに、一ヵ月そこそこのうちに問題点を解決して、地区ごと百人くらいの単位の子供会が、スマーキーマウンテンだけで十五くらいはできあがつていてる。

掘つ立て小屋で、学校に行けない子供に簡単な英語や算数を教えたり、子供会の代表選手を集めサッカーやバレー・ボールの大会などをやるようにもなる。娯楽の少ないスラムのことである。親兄弟までが応援に出てきて、二ヵ月もたつとそれなりのコミュニティができあがつていてる。私の学生にこんなことができたのかと、こちらの方が驚くほどなのである。私どもはこうした類の活動をコミュニティ・デベロップメントと名付けて、インドネシアやタイ東北部などでも展開している。

そういうえば、日本には学校はもとより団地でもマンションでも町内会でも、必ずといつてい
いほど自治会というものがある。お上から^{かみ}の指令があつて組織されているというわけのもので
はない。もつともつと草の根の集団において「自分達のことは自分達で処理しよう」という精
神が、やはり日本人の中には拭いがたく宿つているかにみえる。

私自身、ODA（政府開発援助）の仕事に携わつていて、各国のODA事業案件を見て回る
ことがこれまでに相当多くあつた。一つのODAプロジェクトが完成するまでには現地の人々

を多く雇用することが必要となるが、これらの多くの人々を、時に言語や人種や宗教の異なる人々をも含めて一グループにまとめてあげることは容易ではない。自治組織づくりのプロである日本人ファシリテーターが熱心に指導するうちに、自然と有機的な組織へと生成していくさまざまを私は目にし、熱いものを感じたことが何度もある。

日本人が外国で仕事をする場合は、構造物の建築などのハード面では強いが、人的ネットワークをつくつたりするソフト面では弱いところがあると指摘されるのがつねであるが、私にはそうは思われない。その逆が真実である。マニュアルではなくOJT（現場訓練）を通じてリーダーを育成し、各ワーカーの自治的集団をつくりていく日本人の能力は、もつと国際的に生かされていいと私は考える。そうすることによって、日本のODAの「質」をさらに上げたいと思うのである。